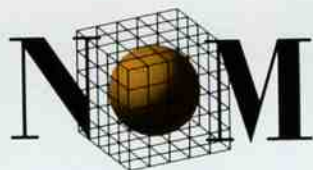


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第3号

1994.10

新潟県立近代美術館 開館1周年

—— 目で追う1年間の歩み ——



1993.7/15 開館



7/15～9/5 大光コレクション展



7/31～8/1 李禹煥の公開制作



8/7 シンポジウム



8/24 入館者5万人達成
(開館35日目)



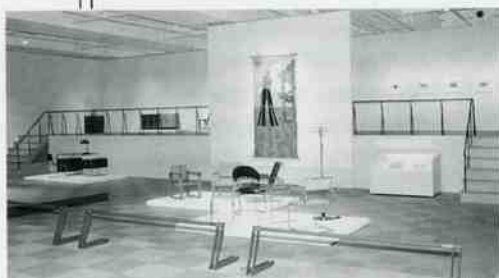
9/17～10/17
「野間コレクションとその時代」展



12/18、1994.1/22、2/19、3/26
近代美術館鑑賞講座(音楽)
講師：当館館長 前川誠郎



10/30～12.5 ベルギー現代美術展



1/21～2/27 佐々木象堂とモダニズム



5/21
入館者20万人達成
(開館312日目)

4/20～5/29 シカゴ美術館展

4/8 近代美術館友の会発足
会員は1280名を数えました。



3/1
エルミターージュ美術館館長来館記念講演

—— ケーテ・コルヴィッツの彫刻《母親と子供たち》について ——

比較的小振りなものの多いコルヴィッツの彫刻作品の中でも、《母親と子供たち》(1924-1937年、挿図)は、戦死した次男ペーターの眠る戦死者墓地に建てられた1932年の石彫《両親》(《父》が高さ151cm、《母》が高さ122cm)に次ぐ大きさであり、実際に置かれた空間の中で有無を言わさぬ強い存在感を主張する。その存在感は、誇張された大きな手足を持ち重量級のレスラーを思わせるがっしりとした母親の体付き⁽¹⁾と、その母親が身体をまるめ両手両足でしっかりと二人の子供たちを抱え込んで形づくる全体から発散されて来るようである。また、その確かな量感が周囲を圧する一方で、内に凝集する姿勢は静かな感情を包み込んでみえるようである。



ここで子供たちを抱える逞しい母親像の原形をコルヴィッツの作品の中に探ってみると、1903年の版画《女と死せる子》(Klipstein 72)を見出すことができる⁽²⁾。死んだ子供を抱き締め遺体の胸元に顔を埋めて嘆く女の姿が画面一杯に表現されているこの作品からは、子を失った母親の

激しい慟哭が見るものの胸中に強く響いてくる。それは、太い両腕で亡骸をかき抱く母親の仕草の荒々しさが眼前に迫ってくるからであろう。心中の深い嘆きは激しい抱擁となって表に現れ、その抱擁の強さを示すように母親の体付きはごつごつと逞しい。前に投げ出された太い足や死んだ息子を抱く筋肉質の一の腕は、折れそうなほど華奢な少年の亡骸と対置されることでより一層際立って見える。この作品でコルヴィッツは力強い裸体表現を通して内的な激しい感情を視覚化しようと意図していたのではないだろうか。

それから20年後になって構想された⁽³⁾《母親と子供たち》にも、逞しい裸体表現は再び用いられている。ここでは子を庇護する身振りがはつきりと強調され、版画と彫刻という表現分野での決定的な違いもあるが、以前の強く激しく訴える感情表現との結びつきは解かれていく。

この作品において、母親の肢体は、エルンスト・バルラッハ (1870-1938) との影響関係の一端を示す、形態的に大きく力強い塊を作り出そうとするコルヴィッツ彫刻の造形上の指向⁽⁴⁾に十分に寄与している。子供たちに寄り添い、庇護するように覆い被さる母親によって一体となった三人の形態は一つの大きな塊となり、その小山のような量塊が強力な存在感で周囲を圧する。その塊の堅固さ、緊密さを示すように母子は近くに顔を寄せ合っている。だが、それは形態的な一体感を形成すると同時に、母子間の精神的な強い絆を示唆するものでもあり、他者を寄せ付けない。また、保護するように二人の子を抱える母親の姿勢は、その動作そのものが示すとおり、外界に対

する拒絶の姿勢を明言するかのようである。強靱な肉体は外に働き掛けて量感を主張する一方で、母子間の絶対的な関係を保護し、母子の感情を内に閉じこめてもいるのである。

ここで子供たちに顔を寄せ俯いた母親の顔を覗くと、蔭になった表情は曖昧で読み取り難い。確実に見て取れるのはただ閉じられた瞳である。このモチーフは、コルヴィッツの芸術に登場する多くの人物に見出すことができ興味深い。ただこの《母親と子供たち》では内省的であると同時に、暫しの間外界から目を逸らし、自己の内面に逃れて休らうことでもあるのだろう。簡潔で力強いイメージを伝えようとする芸術家と、自己の内側に沈みこもうとする芸術家との両方が、この作品には同居しているように思えるのである。

(美術学芸員 桐原 浩)

註
 (1) 素描習作を見ると、腰周りについて「がっしりとzu breit」「丸々とsehr rund」、また「右足やや長く rechtes Bein etwas länger」などの変更修正のための覚え書きが書き込まれているものがあり、表現を強めようとする意図が窺える。Otto Nagel, Werner Timm, *Käthe Kollwitz: die Handschneidungen*, Berlin: Henschel-verlag Kunst und Gesellschaft, 1980, S.416, Nr.1121-1122.
 (2) ボーシナーコルヴィッツがこれら2作品の主眼の関連について指摘している。Käthe Kollwitz, *Die Tagebücher*, hrsg. Jutta Bohne-Kollwitz, Berlin: Siedler Verlag, 1989, S. 889.
 (3) 母親と二人の子で構成される現在の構想が生まれるようになったのは、1923年の双子の女の子の蘇の誕生以降のことであるが、その以前から母と子の像の構想が温められていたことが指摘されている。Nagel-Timm, *ibid.* / Bohne-Kollwitz, *op. cit.* S. 861.
 (4) Stephanie Barron, ed. *German Expressionist Sculpture* [exh. cat. Los Angeles County Museum of Art], The Univ. of Chicago Press, 1983, p.136. / Elizabeth Prelinger, *Käthe Kollwitz*, [exh. cat. National Gallery of Art, Washington D.C.], Yale Univ. Press, 1992, p.173.

カール・ラーション展 —— 親と子のギャラリートーク ——

8月27日から9月25日まで開催されたカール・ラーション展では、当館としては初めての試みであるギャラリートークを行なった。この展覧会が教育普及展として位置付けられていること、また今年は国際家族年でもあり、親子向けの企画として実施したものである。

他の美術館でも“ギャラリートーク”と名のついた会が度々開催されているようだが、今回はギャラリートークを、来館者と学芸員、あるいは来館者同士が作品を見ながら対話をするにより、より深く楽しく

作品を鑑賞しようとする会として促して実施した。一般的な解説会のように来館者が受け身の姿勢で知識を受け取るのではなく、積極的に展覧会に参加し、自身の目で見て感じ取る本来の作品鑑賞の姿に立ち返ってみようというものである。特に子どもたちに作品鑑賞の楽しみを知ってもらい、将来柔軟な心で美術品鑑賞を楽しむ豊かな人に育ってほしいと願うのである。

第1回目のギャラリートークは8月28日、夏休み最後の日曜日であった。カール・ラーションのわかりや

すく親しみやすい作風のせいか、子どもたちやお母さんの反応は上々！次々と絵の中に描き込まれたものを発見し、作品の中の状況を読み取っていく。それぞれの家族の様子や、作品の珍解釈も飛び出した。

まだまだ初めての試み。改善点も多くあると思うが、子どもたちと話をする楽しみは格別である。今後も普及活動の一環として続けてゆきたいと思う。

(美術学芸員 宮下東子)

日本の美と心 山種美術館展 10月7日(金)~11月6日(日)

山種美術館は、山種証券、山種産業の創始者である故山崎種二氏の美術コレクションを中心に創設されました。氏は、企業経営はもとより美術にも深い関心と興味を示し、優れたコレクターとして、数多くの日本画の名品を収集しました。また、氏は作家との交流も広く「経済と文化を結ぶヤマタネ」の基礎を創るなど、日本文化・芸術の振興に多大な功績を残しました。

今回の展覧会では、山種美術館の

所蔵品より優れた名品を選び、近・現代日本画の精華を三部構成で展示し、日本の美と心にふれるものです。

第一部は、横山大観、菱田春草を中心とした、明治期における近代日本画の幕開けから、初期日本美術院など日本画革新の作品を、また第二部は、竹内栖鳳、川端龍子に代表される、大正・昭和戦前期における京都画壇、東京画壇など近代日本画の作品を中心に、そして第三部は奥村土牛、東山魁夷など、昭和戦後期に

おける各会派の新日本画創造への追求を試みた現代日本画の作品を紹介いたします。

また今回は、本県出身の日本画の巨匠、小林古径の《清姫》をはじめ、土田麦僊の《大原女》、横山操の《越路十景》の全作品を特別展示します。

近代日本画の黎明期から大正、昭和へと展開していった近・現代日本画の流れを60点の名品で壮大に辿ります。



小林古径《清姫》1930年



奥村土牛《鳴門》1959年



竹内栖鳳《斑猫》1924年 (重要文化財)



村上華岳《裸婦》1920年

土田麦僊の「大原女」について

「日本の美と心 山種美術館展」に土田麦僊の《大原女》が出品される。金地に緑青と群青を多用し華麗で装飾的、落ち着いた豊饒な気韻を湛えた作品で、麦僊28歳のときの作品である。

明治末期・大正期・昭和戦前期と近代日本画の創造を目指して多くの作家が活躍したが、その一人に東洋

の古典と西洋の美術を学ぶことにより、独自の創造力による絵画世界を開花していった土田麦僊がいる。人物画、花鳥画、風景画、静物画など一作ごと新たな分野に挑み、多才な煌めきをみせ作品制作を行なった作家である。

麦僊は「舞妓の麦僊」として知られ、《舞妓林泉》、《三人の舞妓》、《明

粧》など舞妓を描いた多くの名作を残している。生涯を通して女性像を追求した麦僊は同じテーマで何度も制作しながら、その都度構成や主題を変えている。

特に、麦僊が好んで描いた女性像は京都に縁ある「舞妓」と「大原女」であり名作が多い。



大原女 1915年

麦僊は《大原女》として三つのバージョンを製作している。一つは1915年（大正4）第9回文展に出品され、山種美術館の所蔵となつて今回の展覧会に出品される。一つは1923年（大正12）に制作されたもので個人蔵となっている。一つは1927年（昭和2）第6回国画創作協会展に出品され京都国立近代美術館の所蔵となっている。この3点が麦僊の描く《大原女》の基本的パターンとなつており、小幅として制作する場合には3点のなかの一部分を抜き出している。この稿では便宜上、山種美術館所蔵のものを《大原女1》、個人蔵のものを《大原女2》、京都国立近代美術館所蔵のものを《大原女3》と分けてみたい。

《大原女1》は四曲一双の紗本金地彩色屏風で第9回文展で3等賞を受賞し、当時の批評家たちはこの作品に対して一斉に称賛の賛辞を送った。しかし、文展の審査員が与えた3等賞という評価はこの作品の出来栄えに対してあまりにも低いものであった。美術批評家の古川修は『美術新報』（大正4年11月）のなかで、「この畫は氏が今までやって来た、色々の技巧の研究を打って丸とし、然もよく磨き上げられたのでせう。こゝには土佐も四条も、宗達も、後期印象派も總てとり入れてあります。」

（原文ママ）と述べている。

麦僊は《大原女1》を描くにあつて京都智積院にある桃山障壁画を規範とし、その雄壯な裝飾性を近代に蘇らせ、あふれる才能を余す事無く發揮している。大胆な構成、華やかな色彩、豪放な中にも計算された緻密さがあり、圧倒的な裝飾性には目をみはるものがある。主題の「大原女」はこれまで画題としてはあまり描かれることはなかったが、麦僊は美の対象として「働く大原女」を風景とともに描きあげている。桜を描くために吉野山に取材を行なつたり、古画を研究したり、大原の里にも長期滞在して構想を練っている。大原女の足先に未完成のような部分を残して足の動きを表わそうとしており、「静」と「動」を表現しようとした当時の麦僊の制作意図が窺われる。

《大原女2》は六曲一双の絹地裏箔彩色屏風で、1923年麦僊が欧州遊学から帰ってきてすぐに描いたものである。パリではゲランの研究所に通い人物デッサンや油彩画の研究を行なっており、《大原女2》ではその成果が生かされている。水彩画のような筆触で描いてあり軽やかな感じがするが、大原女はしっかりとデッサンされており、簡潔な表現にも工夫の跡がみられる。左隻と右隻に描かれた大原女は陽と陰の関係にもう

けとれる。

《大原女3》は絹本着色額装、1927年第6回国画創作協会に出品したものの。一辺が約2メートル15センチあり欧州滞在中から構想を練り、完成まで4年の歳月をかけた大作。西洋美術から学んだことを随所に取り入れており、座る大原女の姿はマネの《草上の昼食》の構図を基にし、背景の風景はルソーの影響を受けている。人物や草花の描き方、背景の整然とした家並みの構成、透明感のある色調などに欧州での研究を日本画に取り入れた成果をみることができ、麦僊が西洋美術から得たことの集大成といえる作品である。

麦僊は《大原女3》を完成させたあと、制作の眼を西洋絵画から東洋絵画へと転換させ、表現様式を次第に精神的なものへと転化している。以後、麦僊は大原女を主題として大作を制作することはなかった。

（普及係長 横山秀樹）



大原女 1923年



大原女 1927年

次回の展覧会 佐藤哲三展 平成7年2月10日～3月26日

—— 会津八一との出会い ——

はじめに

蒲原平野に生き、その他を自己形成、創造活動の空間と定めて、蒲原の人と風土を描き続けた画家佐藤哲三。英文学者・日本美術史研究者にして歌人、書家でもある会津八一。

二人の組合せは以外かも知れない。

しかし、短期間であったが、二人の間には物心両面にわたる交流があった。ちなみに今年は佐藤哲三の没後40年にあたる。当館でもこれを記念した遺作展を、来年2月に開催の予定でいる。幅広く多彩であった彼の人物交流の一端として、この小文で二人の関わりを紹介したい。

出会い

1953年（昭和28）の晩秋のある日、佐藤哲三は妻を伴い、新潟日報学芸部の記者小林理一の案内で初めて新潟市南浜通りの邸宅に会津八一を訪ねた。訪問の目的は、この年の12月に開催する哲三の作品展を主催するため有志によって組織された「佐藤哲三後援会」への入会を依頼するためだった。「佐藤哲三油絵展」は同年の12月8・9日に新潟市の小林百貨店で開かれた。後援会が発行した「佐藤哲三紹介」によれば、会の発起人に新発田市長近勇次ら、推薦者には会津八一、岡田正平（知事）、坂口猷吉（新潟日報会長）らが名を連ね、さらに福島繁太郎、梅原龍三郎、武者小路実篤、羽仁五郎らが文章を寄せて、哲三を支援する人々の多彩さが伺える。さて、哲三一行が来意を告げたところ、八一は二つ返事で快諾してくれた。「気難しい方だと聞いていましたので、本当にうれしく思いました」と豊子未亡人は当時を懐かしむ。会津八一といえば親交ある人々に誰彼となく絶交を申し渡し、気性も複雑で、人の好き嫌いがはっきりしていたという。初対面の哲三にとっては誠に幸運な出会いという

べきであろう。概して、哲三は初対面の人に好印象を与えたようである。1938年（昭和13）1月、二度目の個展を新潟新聞社で開いた際、坂口猷吉を紹介されたが、坂口は「哲三君は絵もいいが人間が本当にいいね」と大声で誉めたという。時流に流されず、蒲原の風土に、より真実な絵画を求め続けた画家の姿勢とヒューマンな画風は多くの人の共感を呼び起こしたようだ。

一通の手紙

哲三と八一の関わりを示す一通の書簡が「会津八一全集」（中央公論社1982年）第10巻に収録されている。一部を紹介しよう。

昭和二十九年六月六日 新潟市南浜通りより厚生課松尾一夫宛

拝啓、夜前も申上候通り郷土の出した稀に見る天才画家佐藤哲三君のために、特に御配慮をたま（は脱か）り同君も臨終にくりかえして感銘し居りしよし後に傳へ来り候。まことにありがたく深く御禮申上候。

（後略） 頓首
六月六日 会津八一
松尾一夫様

松尾氏は当時、新潟県民生部の厚生課長兼児童課長で八一と交流があった人である。1954年（昭和29）の5月頃、八一邸を訪れた松尾氏に八一は農村風景の絵を紹介して「この画を描いた佐藤哲三は、今病気で寝ている。早く元気になってほしい。金にこまっているので回復したら画をかかす約束でワシが後援会をつかって資金を集めているところだ」と語り、松尾氏に哲三一家に対する行政の援助を依頼したという。書簡中の「特に御配慮をたまはり……」の件はこのことを指すと思われる。



佐藤哲三（子供と稱）1941年

この時、哲三は宿痾の白血病の療養のため県立新発田二の丸病院に入院中であった。初対面からわずか半年だが八一の哲三に対する厚意の寄せ方は想像以上に強かったようだ。

なお、書簡中に「臨終にくりかえし」の件があるが、哲三が死亡したのは6月25日で、6月6日の日付に疑問が生じる。松尾氏に照会したら八一の誤記であることがわかった。

おわりに

ここまで書いてきて、筆者は「何故かくも八一は哲三のために心を砕いたか」の思いにとらわれる。当時学界も鑑賞界も自己の業績を正当に評価しないと云って慷慨したとされる八一にとって、真摯な制作を続けながらも、美術界の傍流に身をおき名声からは遠い哲三の存在に自分の境遇を重ね、強い共感を覚えたのでは、と思うのだがどうだろうか。

（専門学芸員 小見秀男）

来館者の声

子どもたちの手紙、感想文 —— シカゴ美術館展より ——

当館の開館一周年記念事業、「シカゴ美術館展」では約9万人の来館者を記録しました。当館では学校の免除制度がありますが、来館者のうち小・中・高等学校の授業その他で来館した児童・生徒は七千名余りを数え、免除申請をした学校数は延べて92校になりました。

展覧会が終わってから何通も送られてきた感想文を一部紹介します。

私は、この美術館へ来て鑑賞し、すばらしいことを学びました。それは、どの絵もみんな、描いた人の伝えたかった事が伝わってくることです。—中略—苦労した思いが、世界中の人をおどろかしたり、幸せな気持ちにさせたり、うけとめられたりする事が、すばらしいと思います。

(小6 女子)

(写実的な作品について)どれも絵とは思えません。でも同じ様に写真に写したとしても、こうはいかないでしょう。なぜなら、画家が描いた絵は一筆一筆命をふきこむように描いたものですが、写真は多少の感情はこめられますが、絵のようにはとて命は吹きこめません。

(小6 女子)



「作品にはさわらないで下さい、万年筆やボールペンを使わないで下さい、写真をとらないでください。」などと言われた時、ぼくは、「なんだ、それぐらい、いいじゃないか。」と思っていました。ところが、「シカゴ美術館」の「すてき」な絵を見て、大事な事に気がきました。「世界中の人が見る絵なんだ。」と、理由は自分でもわからないけど、たぶん、自分も、こんな絵を描けたらいいなあ、と心の中でそう思ったからだと思います。

(小6 男子)

絵を見ることによっていろいろな感情がとらえられることを知り、一つの勉強かなあと感じました。—中略—いろいろな面で気持ちにわけはわからないけど“まんぞく感”ができました。

(中2 女子)

教科書や写真だけという狭い範囲での学習ではなく、すべてにおいて本物ということ、絵に対する深い感動を覚えた生徒も多かったことと思います。そして、その中の一人に私があります。—中略—その頃は芸術については何も知らず、ただ呆然と絵をながめていましたが、今日は違っていました。作者の絵に対する情熱が私にも伝わってくるような気がしたのでした。

(高2 女子)

表紙作品解説 下村観山<入日>

1915年(大正4)
絹本軸装
55.8×122.3cm

木の葉を散らす一陣の風。家路を急ぐ釣り人と馬。沈む太陽と、のぼる月。秋の夕暮の光景です。

薄墨で描かれた右側の樹木と、左側の空間に描かれた濃墨の馬とが、絶妙のバランスを保っています。馬の脚の動きはもちろん、舞い散る落

葉や編笠による風の動きにも見事な筆の冴えを見せています。

優れた技巧を持ち、狩野派、大和絵、琳派など、広範囲にわたる伝統技法を学んだ観山は、日本画の近代化に偉大な足跡を残した画家でした。

利用案内

- 開館時間 / 午前9時～午後5時
- 休館日 / 毎週月曜日
ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。
※12月26日(月)～1月3日(火)、
3月27日(月)～3月31日(金)
は保守点検のため休館します。
- 観覧料金 / 企画展観覧料
企画展によって観覧料が異なります。なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。
・常設展観覧料
一般……400円(320円)
大学・高校生
……200円(160円)
中学・小学生
……100円(80円)
※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市富岡町字居掛278-14 〒940-21
TEL. 0258-28-4111(代) FAX. 0258-28-4115

美術連話(3) 「宮 芳平という画家」

新潟県立近代美術館長 前川誠郎



宮 芳平(逃避)

ナビ派やアール・ヌーヴォの芸術が、未知の国日本からの音信を敏感に受け止めた西洋のレスポンスであることは、当館蔵のドニの傑作「マルト・サンボリスト」について述べた(先号参照)。しかしジャポニスムは日本の触発によって生れた現象であるとは言え、それは飽くまでも西洋人の創造活動であって、日本人が積極的に手を貸したというものではない。日本美術を直模したリヴィエールやブラックモンなどの作品を別にすれば、ジャポニスムの名作は、研究者から具体的に指摘されて漸く気付くような大胆な手法で日本のモチーフを変容させている。ゴッガン、ゴッホはその一例である。

一方開国当初より日本は西洋美術の移入に努め、学校を作って西洋人を教師に迎え、また多くの美術家を欧米へと送った。それから今まで約百五十年、その間に生れた作品が我が国の近現代美術と呼ばれるものである。絵画に関していまだに洋画と日本画の別があるのが不思議であるが、技法に差があるだけでイメージ

に大差はない。殊に何百号というような展覧会向きの日本画には、これが日本画かと訝からずにはいられない作品が沢山ある。また油彩であっても画家の眼が古来の日本的伝統から一步も出ていないものも少くない。

油彩技法は十五世紀初頭のころにフランドル(今のベルギー)で生れ、その卓抜なる写実性の故に広く西洋各地へ拡がっていった。しかし、それを受容したイタリア人が本当に油彩を駆使できるようになるまでには百年くらい掛っている。それは単に技法の問題である以上にビジョンの変化をも伴う革新であったからである。

ジャポニスムが短い期間ではあったが、何故あれだけ大きな成果を生んだかと言えば、丁度そのころ(十九世紀後半)西洋で再びビジョンの変化が兆し始め、浮世絵などのわが美術がそこに油を注いだからである。日本はいわば触媒の作用をしたのであった。

その時期に始まったわが近代洋画は、西洋美術の目まぐるしいまでの

変貌を受け入れるのに忙殺され、本当に自身のものを握みきれていないように私には思われる。近年わが新潟近美が収蔵した宮芳平の「聖書シリーズ」十三点をみていて、私はこれまでの日本の西洋受容に関しいろいろと考えさせられるものを覚えた。それはこの画家が七十歳を越えてはじめて形に示したキリスト教への関心である。日本人の画家が描いた絵で聖書に取材したものは極めて稀である。クリスチャンが少いからと言えばそれまでかも知れないが、西洋文化——絵画も——からキリスト教を除いてあとに何が残るのであろうか。入信するかどうかは別にして、キリスト教を理解せずして西洋は分らない。古代の再生を謳歌したルネサンスも、キリスト復活の思想があったればこそこの現象で、キリストはアポロに、そして聖母はヴィーナスに姿を変えて現れたのがルネサンスである。

宮画伯は珍らしくも敬虔なクリスチャンであった。長年のその関心が晩年の聖地巡礼となり、「聖書シリーズ」を生んだのであるが、例えば《マリアの驚き》即ち受胎告知の場を戸外の井戸の傍に設定したり、ゲッセマネの祈りの画題を《ニザンの月》とするなど随所に宮氏の聖書研究の跡を偲ばせる。画風にルオーからの感化を否定できないが、いずれもなかなかの力作揃いで、《(エジプト)逃避》、《ゴルゴタ》、《エフタとその娘》等が特に印象に残る。シリーズを通じてどの絵からも作者のひた向きな傾倒が感じられ、彼が長い生涯に残した多くの作品の中でも大きな異色作となっている。彼よりもはるかに著名な洋画家たちの絵では満たされなかった心の希求に老画家は立派に応えているのである。